

東京都の文化施策を語る会（第10回）議事要旨

- 1 日 時 平成17年12月13日（火） 10:00～11:30
- 2 場 所 都庁第一本庁舎25階 115議室
- 3 出席者 福原座長、今村委員、岡本委員、平田委員、太下専門委員
- 4 次 第

- （1）開会
- （2）資料確認
- （3）意見交換 [テーマ：最終のまとめ]
- （4）閉会

5 発言要旨

山本文化振興部長

ただいまより、第10回「東京都の文化施策を語る会」を開催させていただきます。
委員の出欠でございますが、柏木委員はご欠席となっております。

さて、本年2月に第1回を開催して以来、福原座長をはじめ各委員の皆様には、大変お忙しい中、ほぼ1年にわたりご出席いただき、また、貴重なご意見を賜りありがとうございます。今回は、「語る会」の最終回でございます。これまでいただきましたご意見・ご提言を「案」としてまとめました。

それでは、これより先は、福原座長に進行をお願いいたします。

福原座長

皆さん大変お忙しい方々ばかりなのに、1年間に10回もいらしていただきました。この間、知事をはじめゲスト委員の方々からも大変貴重なご意見をいただきました。改めて、私自身もいろいろと認識を深くしたところでございます。

それでは、事務局から資料の説明を、その後、太下専門委員から『提言(案)』の説明をお願いします。

文化振興部副参事 （資料説明）

太下専門委員 （『提言(案)』説明）

福原座長

では、皆様のご意見をいただき、修正する部分や膨らませる箇所などについて、決めていきたいと思っております。

今村委員

1年間にわたり、本当にいい議論ができたと思っています。ただし、我々は1年間をかけてアジェンダを洗い出しましたが、具体的に何をすべきかといったことに関しては、まだまだ継続して議論をしていく必要があると思っています。

特に、文化というのは、いわゆるアートだけではなく、都市景観や生涯学習など、様々な分野にわたっています。そういったことから、東京都の文化政策が、いわゆる芸術政策だけではなくて、都市、観光、教育などすべての施策に「文化」という視点を持つことが大事だろうと思います。

岡本委員

基本目標として、「都民自身が文化的な魅力を感じる都市・東京」とともに、「世界が文化的魅力を感じる」ことも掲げており、とても的確な位置づけだと思います。

観光というのは、「国の光を観る」と書きます。「国の光」がここで言う「文化」です。「国の光」というのも「地域の光」ですが、その光は何なのかというと、その地域の暮らしにおける洗練された部分のことです。旅行者が見て、人がうらやむような生活の知恵など、洗練された固有のスタイルが文化だと思います。

ですから、文化というものはアートだけではなく、景観も文化の表象で、その地域の洗練された暮らし方を形あるものとして表現しているものです。観光客がそれに対して、いいなあと感じるわけで、その観光客のまなざしを見て、地域に住んでいる人たちが、その地域に対する誇りを感じ、アイデンティティを育むことにつながる。文化というのはそういう意味もあると思います。

福原座長

まさにそのとおりで、文化は常に継続的に蓄積されるライフスタイルとも言えます。

平田委員

欲を言えば、もう少し強い表現やミッションステートメントの具体的な数値目標などを出してもいいと思います。例えば、「東京に住む小学生には在学中に3回、中学

生には2回、生の芸術に触れる機会を保障する施策が必要である」とか、「東京都の芸術文化施設では、館長、芸術監督、キュレーターなど専門家が強いリーダーシップをとって運営する」などです。

アーツ・カウンシルについても、大事なものは調査・研究に関する事務局機能ですので、世界レベルの文化施策についての調査・研究機関を東京都が独自に持つとか、もう少し入れてもいいのかと思いました。

福原座長

少し強調していただきたいことは、今、世界はグローバル化で単一化する一方、その反作用として、平準化すればするほど地域のアイデンティティは何だろうかということが高まっていく。これは、グローバル化とローカリゼーションの2つの向き合う力です。平準化という大きな波と、一方で地域化というとんがった波の2つが並行してあるとの認識が大事です。

また、首都圏は多くの人口を抱えているという特殊性がありますので、日本を代表する首都圏としての東京のポテンシャルについても触れておく。

さらに、文化・芸術に関するいろいろな事業は、単年度あるいは2年や3年の成果や採算で考えても全く意味がないということです。特に、文化の継続性ということが次世代を育てることになるので、2～3年度の成果・採算とは別に、長期のビジョンを立てて、その物差しで、例えば第1段階としての3年間はどんな成果が上がったか、といったことをやったらいいと思います。

参考までに、豊島区では文化振興を考える会議が発足しまして、そのときに区長が、豊島区のすべての政策を「文化」のフィルターを通して洗い直すということをおっしゃいました。そのことも重要なことだと思います。

太下専門委員

今回の「語る会」の提言は、提言という性格もあって、あまり具体的な事業については書いてないわけですが、例えば、アーツ・カウンシルの問題などについては、これを本当に検討していこうとするとかなりの体力や気力が要ることになります。そういったことを、ぜひ継続的にご議論していただきたいと思っております。

岡本委員

首都東京の役割をどのように自覚するかというところが大事です。この提言の中にもありますが、アジアの文化首都としてのイメージを国際的にアピールしていくプランやイメージが欲しいと思います。

観光の立場から都市の魅力について一言で言えば、エスニック・ダイバーシティというか、文化的な多様性だと思います。パリやニューヨークには中華街があるのに、なぜ東京にないのだろうかと思議です。コリアンタウンなどができつつあって大変結構なことだと思いますが、多文化共生のアジアから、新しいライフスタイルや価値観を発信するようなことも文化戦略の一つだと思います。

平田委員

今のお話を引き継いでですが、私は新宿の大久保小学校で、子どもたちと演劇をつくっています。大久保小学校は、子どもの親の国籍は12カ国にわたっています。3割が親のどちらかが外国籍で、2010年には5割になる。それから、15%は日本語が話せない。

しかし、今までみたいに、日本の言葉や文化だけを教えていけばいいという時代ではなくなっているのです。お互いの文化のすばらしさをそれぞれ学び合おうということで、それを劇にして、最後は公民館で地域の方にも作品を見せます。つまり、大久保というのは、いい面も、悪い面も、未来の東京の像だと思います。

お芝居をやってみると、子どもたちは本当に元気ですし、これをどのようにまちづくりにまで持っていくかということが課題ですが、そういうときに、芸術文化は非常に力を発揮します。ですから、アジアの文化首都であると同時に、既に多国籍化しているという認識に立って、東京の場合には文化政策を決定していくことが必要です。

また、世田谷区は日本語特区になり、来年4月からは全部の小・中学校に演劇や表現の時間をとり入れます。言葉はできなくても、子どもたちは勝手に遊び始めます。だから、そういうときにも、演劇が一つのきっかけになると思います。

イギリスやフランスもそうですが、スポーツも含めた文化によってしか融合できない。そこにお金をかけるしかないのです。それでも、イギリスでもテロが、フランスでは暴動が起こるわけですから、日本は放っておくと大変なことになると思います。

福原座長

今のお話を伺うと、これは文化だけの問題ではないのですが、特に文化関係の将来を開くとなると、人材育成が大事になってくるのだと感じます。

平田委員

ですから、首都大学東京との人材育成の連携も大事で、アートマネジメント系だけでなく、現場で表現教育ができる人材も積極的に育成していく必要があると思います。

岡本委員

私も、首都東京が潜在的に内包している文化多様性を表現する機会を持つべきだと思います。日本は、ずっと西洋の文化を取り入れることをしてきましたが、そろそろアジアの文化を発信していく機会を用意する。特に、東京が抱えている子どもたちの文化多様性を表現することは、非常に貴重な試みだと思いました。

太下専門委員

文化多様性、つまり、文化を通じた交流は非常に重要だと思います。韓国では、まさに文化を通じた交流を国策として取り組んでいます。首都のソウルをアジアの文化の首都にしようという戦略の下に、ここ数年の計画として「アジアン・パートナーシップ・プログラム」を文化観光部の目玉事業として開始しました。

これは、アジアの各国から、アーティストではなく、劇場のプロデューサーとかミュージアムの学芸員、または文化関係の技術者といったマネジメント系の方を韓国の公立文化施設等に招いて、そこで数カ月みっちり学ぶだけでなく、韓国の文化や韓国人のことも知ってもらい、そして国へ帰ってもらうというプログラムです。

日本としても、これに対抗するような魅力あるプログラムをつくっていかないと、アジアの文化首都が日本ではなくなってしまう可能性が非常に高いですといます。

今村委員

私もソウルに行った際に、自分たちで次の時代を切り開いていこうとするエネルギーを感じました。東京は、活動量としてのエネルギーはあるけれども、それがどこに向かっているのかが気になります。東京が鑑賞の場だけでなく、創造の場となるためには、フレキシブルで動きやすい仕組みが必要であり、それが今後の東京の文化施策に求められることだと思います。

福原座長

文化創造的な交流について、韓国の話で言うと、まず空港があります。あの空港で世界とのアクセスがよくなりました。だから、文化の前にインフラがあると思います。

もう一つは、人権の問題があります。ナントでは、「人権宣言」から文化に移っていきました。なぜ「人権宣言」をやったかという、かつて奴隷貿易で栄えたということの反省から、それを改めて現代に問い直す試みとして、「人権宣言」を具体的に実現するには文化政策しかないとの論理です。

岡本委員

アーツ・カウンシルというのは、東京都の文化戦略を考えたり構築するための議論をする場だと言われると、なるほどという感じがします。

平田委員

アーツ・カウンシルではないのですが、フランスの外務省文化部には、機動力がある芸術系のシンクタンクがあります。そのシンクタンクが政策決定にまで関与する権限を与えられていることもわかりやすいイメージかと思います。

福原座長

いろいろなお意見をいただいて、ありがとうございました。直接提言の中に入るものと、提言以降に、これからどのような活動を行ったり仕組みをつくるのかなど、いろいろとご意見をいただきました。

必要な修正などについては、座長に一任いただき、皆さんには改めて事務局からご説明申し上げたいと考えております。いかがでしょうか。

(「結構です」の声あり)

福原座長

では、そのようにさせていただき、事務局にお戻しいたします。

山本文化振興部長

ありがとうございました。最後に、山内局長よりご挨拶を申し上げます。

山内生活文化局長

最後の最後まで本当に熱心なご議論をいただきまして、ありがとうございます。

この「語る会」では、行政の立場ではとても思いつかないような、あるいは、違った切り口からの議論やゲスト委員の方からの新しい観点での話など、非常に勉強にな

りました。ぜひこれからも東京都の文化施策についていろいろとご意見を賜りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。